らしっく

自分らしく、粋なくらし

まちづくり・生涯学習情報誌

2009.3
夢見月号
Vol.23

ゆめみつき／春は桜の季節。実はこの桜、夢のように美しく儚いという意味から、「夢見草」とも呼ばれています。このことから3月は「夢見月」という異称があります。新たな門出の季節、人々もそれぞれに新たな目標を「夢見」ていることでしょう。

特集 P1

「まちのげんき」

「桜の馬場」を復活させ、市民の新たな憩いの場に ● NPO法人 二葉の里に桜並木を復活させる会

華やかな姿をもう一度！ 水の都・広島の新名所に ● 猿猴橋復元の会

「最後の人情豊かな町」を本当の最後にしないために ● 段原・街の同窓会

学生とボランティア ● 学校法人石田学園 広島経済大学 興動館 中山紘之

らしっくキャンパス ● 広島経済大学 興動館「武田山まちづくりプロジェクト」

●プラザ通信・・・・・・・・・・ P11
●らしっく情報の森・・・・・・・・・ P9
●ひろしま八区イベントガイド・・・・ P5

特集「まちのげんき」

「まちのげんき」

～変わる街並み、残す街並み～

大きく変わっていく私たちの街、広島。
新しいものができるたび、古いものは忘れ去られがちです。
しかし、地域の元気の源は、昔からの歴史の積み重ねではないでしょうか。
今回は、街の新たな魅力、古くからの魅力、それらを引き出して
地域を元気にしようとがんばっている団体をご紹介します。

①桜並木の完成予想図。かつて流れていた「古川」も復活させる予定
②戦前に撮影された桜の馬場。奥に見えるのは東照宮
③絵屏風をもとに描かれた1800年ごろの広島の城下町

「桜の馬場」を復活させ 市民の新たな憩いの場に

［NPO法人 二葉の里に桜並木を復活させる会］ http://sakuranamiki.jp/

市民の憩いの場だった 二葉山ふもとの桜並木

広島城に飾られている一枚の絵屏風。1800年ごろの広島の城下町が描かれています。右上には二葉山と東照宮が見え、その参道には並木があるのが分かります。

東区二葉の里にある東照宮から南に延びる参道沿いには、古くから桜並木がありました。戦前は、近くに旧陸軍の馬場があったことから「桜の馬場」とも呼ばれていました。当時、桜は約80本はあったといわれています。

その桜並木を復活させようとしているのが、NPO法人「二葉の里に桜並木を復活させる会」です。

開発が進む今が「桜並木復活」のチャンス

「復活させる会」が活動を始めたのは約3年前。理事長を務める田辺良平さん（74歳）は、「二葉の里歴史の散歩道」ボランティアガイドの会の会長でもあります。

二葉山のふもとに建つ饒津（にぎつ）神社、東照宮、尾長天満宮は、かつてそれぞれが萩、桜、梅の名所でした。白島で生まれ育った田辺さんの昔の記憶には、桜並木の眺めがかすかに残っています。原爆が投下され、桜並木が姿を消して以来60数年、一帯はアパート群の陰でしたが、現在は国の遊休地として更地になっています。「この機会に桜並木の復活を」。2006年3月、新聞に投書したところ、同じ意見の方から連絡があり、有志が集まって活動を始めました。

2007年7月にはNPO法人格を取得。地域のボランティア団体や町内会とも協力し、完成予想図や計画書も作成。河川や散歩道の整備のための寄付も募っていきます。

④仮植樹された20本の苗木⑤二葉公民館では会の活動のパネル展が行われた。完成予想図を感慨を込めて眺める田辺理事長

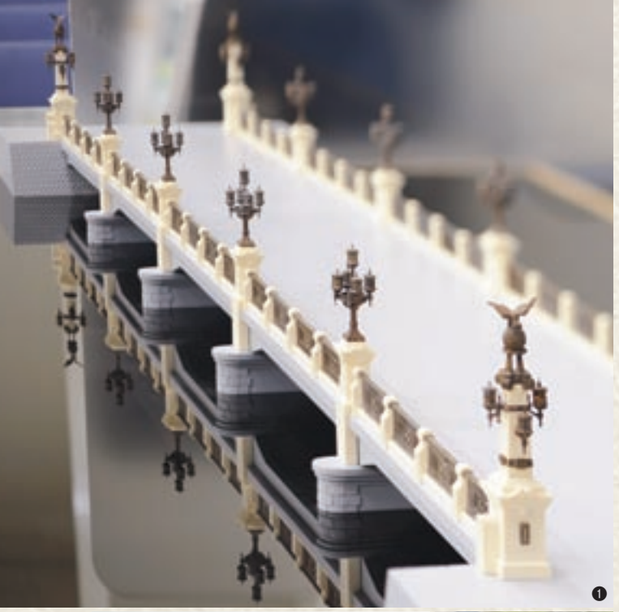
トータルな空間整備で未来を見据えた地域づくり

「復活させる会」は桜並木だけでなく、休憩所や、東西に通る「歴史の散歩道」の整備も計画しています。予定では、すべて完成するのは2013年度。田辺さんは「広島は原爆でそれ以前の歴史と断絶させられた。かつての市民の憩いの場だった桜並木の面影を取り戻したい」と語ります。

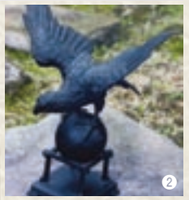
昨年6月には20本の苗木を植えました。「200本ぐらいにはしたいね」。田辺さんの目標は、戦前の倍を超えています。

華やかな姿をもう一度! 水の都・広島の新名所に

［猿猴橋復元の会］☎082・506・3061（広島芸術専門学校）



①猿猴橋の復元模型。長さ178cm、幅25cm、高さ12cmで実物の35分の1サイズ。鷲の像がブルガリアにある1890年代の橋の装飾によく似ているため、設計に外国人が携わった可能性を指摘する声もある



②東広島市の田部さん宅で見つかった鷲の縮尺模型。全長19cmで、橋の上に据えられた現物の約4分の1の大きさ
③縮尺模型を手にして田部さんから経緯を聞く大橋さん。模型を提供した田部俊一さんは橋の建設のため、勤め先の埼玉県庁からわざわざ故郷に戻った
④吉田准教授が作成した復元CG。東岸から見たところ

金属供出で変わり果てた大正ロマン華やかな姿

JR広島駅前に架かる大きな橋、駅前大橋。その下流側に並ぶように架かっているのが猿猴橋です。

大正時代に建造された当時は見事な装飾が施され、広島一ともうたわれた橋でした。戦時中の金属供出によって装飾が取り外され、現在は欄干本体だけとなっています。

この猿猴橋を、往時の姿に復元しようとしているのが「猿猴橋復元の会」。地域の町内会や住民有志が集まり活動しています。

藩政時代は広島の玄関口 猿猴川に架かる唯一の橋

猿猴橋は、16世紀末の毛利氏の築城のころに誕生。京と太宰府を結ぶ西国街道を行き交う旅人たちが、広島城下に入る時、必ず渡る橋でした。

1926（大正15）年2月、コンクリート造りの橋として新たに造られた時は、地球儀の上で羽ばたく鷲の像が据えられ、欄干には川の名にちなんだ2匹の猿が桃を掲げるレリーフ装飾が施されるなど、華麗な姿でした。正装して渡り初めに参加する人たちの写真が現存し、当時の驚きや賑わいがうかがえます。

1943（昭和18）年9月、戦局が厳しさを増す中で金属類回収令により装飾を撤去。その後の被爆や枕崎台風にも耐え、広島市内に現存する橋約2900基のうちで最も古い橋となりました。

⑤金属供出する前の猿猴橋。56個もの照明があった。夜でも明るかったことがよく分かる一枚⑥欄干にあった、桃を掲げる2匹の猿の装飾⑦現在の猿猴橋の姿。水辺には憩いの空間があり、利用する歩行者も多い

苦労して作ったCGがさらなる資料を呼び込む

以前より地域住民の間で復活を望む声はありましたが、昨年春、会の中心メンバーである広島芸術専門学校（南区的場町1丁目）の大橋啓一校長が、大学の後輩でもあった広島市立大学の吉田幸弘准教授に復元CG（コンピューターグラフィックス）と模型の制作を依頼。完成したCGが新聞に載ったところ、東広島市の田部ハツコさんから「鷲の縮尺模型が残っている」と連絡がありました。田部さんの義父の俊一さんは、土木技師として建設に携わった方。工事中の写真12枚も保存されており、細部の復元への貴重な資料になりました。昨年11月、復元模型が完成。当時の姿が蘇りました。

戦争で失われた広島の文化を取り戻す活動

大橋さんは「橋の計画当時は大正ロマン華やかな頃で、初の広島市出身の首相、加藤友三郎が軍縮に力を注ぎ、活躍した時代。地元の人たちに『広島の顔を作ろう』という機運があったのではないか」と語ります。「優美な橋が、広島の新しい名所になれば」。これからは寄付も募り、復元に向けてさらなる活動を続けていきます。

特集「まちのげんき」

「最後の人情豊かな町」を本当の最後にしないために

[段原・街の同窓会] ☎082-281-3792(段原公民館)

▲映像を試写し、編集方針を協議。写真説明を肉声で入れるか、字幕にするかなどを語り合う

◀大段さんの残した数々の写真を前に思い出を語る橋本さん(右)、迫さん夫妻。写真は段原の歴史を語る貴重な資料

▶段原山崎町にあるただ1本の桜だった「宮澤さんの桜」。会のメンバーである樫迫さんには「この花びらをご飯に見立ててよく路地でままごとをした」との思い出も。昨年11月に伐採されたが、2回目の「町の同窓会」でクラフトに生まれ変わった

元住人なら参加できる ひと町丸ごと同窓会

南区段原山崎町は現在、更地が広がり、新しい町づくりが進められています。70年代から続けられてきた段原再開発の最終エリアです。

昨年7月、住民の方の引っ越しが始まりましたが、高齢者も多く、引っ越しの忙しさの中でお互いの連絡先も分からないまま、ということもありました。

そこで、地域のつながりを守ろうと元住民の方が集まり、段原公民館を会場に「町の同窓会」が続けられています。

自分を育ててくれた地域への恩返し

昨年9月、第1回目の同窓会が開催され、70名近くの方が集まって、お互いに近況を報告しあいました。11月には第2回目を行い、開発により伐採された、段原山崎町のシンボル的存在だった桜を使って、キーホルダーやストラップなども製作しました。

第3回目は今年3月。段原に住み、開発の様子を写真に記録し続けてきた故大段徳市さんの500枚にも上る写真を映像VTRに編集し、「大段さんの写真を観る会」と題して、上映会が行われました。この会は参加者を元住民に限定せず、段原エリア全体に広げています。

同窓会を開くために奔走しているのは7人の方たち。全員、段原山崎町に住んだことがあったり、働いたりしたことがあるなど、この町にゆかりのある人たちばかりです。

中心になっているのは、段原に約40年間住んだ橋本操さん。忙しい不動産業の合間を縫って、大段さんの写真に説明を挿入。もう一人のメンバーである迫さんのご夫婦での撮影・映像編集によって、映像VTRが完成しました。

▶第3回目が行われたのは3月12日。大段さんの写真のVTRのほか、段原を取り上げたドキュメンタリー番組なども鑑賞した

次の世代へ伝えたい 隣り同士の「助け合い」

比治山の陰で原爆による焼失を免れた段原は、その後、人口が集中しました。戦後の苦しい時代を助け合った地域のきずなは、「ご近所さんに声を掛け、寝た子を置いて買い物に行けた」というほど。そんな人情豊かな町も高齢化が進み、再開発の後に戻ってくる方は6割程度といわれています。

「広島に残る、人情豊かな最後の町」。会の一人の意見です。それが本当に最後にならないよう、世代を越えて地域のきずなを伝えていく役目を同窓会は担っています。

第2回 らしっくコラム

こちらのコーナーでは、
広島市で活動されている
団体代表の方に市民活動や
ボランティアに対する思いを
お聞きしています。
みなさんの思いと重なり、
活動の輪が広がることを願って…。

学生とボランティア
小さなきっかけが大きな自信に

自己紹介

中山 紘之(なかやま こうじ)

●所属団体● 学校法人石田学園 広島経済大学 興動館

●活動内容● 本学が社会科学系大学の新たな教育プログラムとして推進する「興動館教育プログラム」の教育支援業務に加え、学生自らが行動を興して活動する「興動館プロジェクト」のコーディネーターとして活動している。

●活動のきっかけ●
3年前に現在の業務に携わることになったことによる。

●現在の状況● 前述した「興動館プロジェクト」のうち「カフェ運営プロジェクト」、「武田山まちづくりプロジェクト」、「サクセスストーリー出版プロジェクト」の3プロジェクトを支援する傍ら、ダンス部の顧問にも従事しており、学生と共に刺激的な毎日を送っています。

私がボランティアに関わるようになったのは3年前、本学が新たな教育プログラムとして「興動館教育プログラム」を開始することになり、その中で社会貢献や国際交流、地域活性などの活動を学生自らが行動を興して集団で活動する「興動館プロジェクト」の支援をすることになったことがきっかけです。

現在、私はそのプロジェクト活動の支援をするコーディネーターをしていますが、恥ずかしながらこの業務に携わるまでの23年間、ボランティアとは無縁の人生を送ってきました。こんな私がボランティアに興味を持ち始めたのは、現在の業務に携わったことはもちろん、何よりもプロジェクト活動において、学生たちを成長させて社会に送り出したいという一心によるものでした。

とはいえ、このボランティアという言葉について、無償の奉仕活動という意味で耳にすることはあるものの、突き詰めてそれが何なのかは未だに分かっていません。それが人間の内面から湧き出る自発性によって突き動かされる行動を指すのであれば、私自身を突き動かすものは「何か」を自問自答しています。充実した大学生活を送りたいと願う学生にとっても、その「何か」を探し出すことは大きな課題の一つであり、その答え探しに疲弊し自信を無くしてしまう学生も多くいます。

プロジェクト活動の中には、地域の方々とともに、学生たちが様々なボランティア活動に関わるものが多くあります。学生が自らの企画したものや地域の方々からの要請によるものなど多種多様です。多くの学生のうち、前述した「何か」を理解している学生は積極的に行動し、社会に貢献することで自らの成長につなげていると見受けられますが、「何か」を理解していない学生は必ずと言っていいほど行動することを躊躇します。しかし、そのような学生ほど、活動後は充実感や達成感を得て帰ってきてくれます。考えるだけではなく、実際に行動したことにより「何か」の一端を見つけたに違いありません。

私が思うに、最近の学生たちは中途半端が許されない現代社会の中で臆病になり、自分自身を発揮しきれていないのではないかと感じています。中途半端であっても、小さなきっかけで大きな自信を手に入れます。中途半端であっても、小さなきっかけで大きな自信を手に入れた学生は魅力的に見えます。今での積み重ねが学生の自発性を引き出す重要な鍵であり「何か」の答えではないかと考え始めました。これからの社会において、ボランティアというものが、日常的に慣れ親しむファッションや音楽といった、自分を表現するひとつの手段として若者に浸透していけば、もっと良い社会になるのではないかと妄想を膨らませています。

◀環境保全型森林ボランティア　休憩の様子

らしっくキャンパス
学生から見た学生による市民活動紹介

レポーター
広島市立大学マスコミ研究会
児玉 健一、原田 靖子、
大下 陽子

広島経済大学 興動館
武田山まちづくり
プロジェクト
代表　奥西 薫さん

第三回の「らしっくキャンパス」では広島経済大学、興動館プロジェクトの武田山まちづくりプロジェクト代表、奥西さんにお話を伺いました。

武田山まちづくりプロジェクトは広島経済大学が主催する、学生が自ら企画・運営を行う「興動館プロジェクト」のひとつで、地域貢献をテーマとして活動を行っています。

昨年は武田山での清掃登山をはじめ、近隣小学校児童との遠足登山、興動祭での竹製品の販売・配布など様々な活動をされていました。

奥西さんが武田山まちづくりプロジェクトに参加したきっかけは、奥西さん自身の子どものころの経験によるものが大きいそうです。奥西さんは子どものころに自然に囲まれて育ち、経済大学に入学した際、地元に「武田山」という里山がありながら、それを知らずに過ごす子どもたちのことを知りました。そして「山の良さをもっと知ってもらいたい!」と思い、このプロジェクトへの参加を決めました。

「何か活動を行う際にメンバー一人当たりの負担が大きくなってしまうこともあるので、そんな時でも自分たちが活動を続けていくために、楽しんでやっていくことを心がけよう」と奥西さんたちは考えています。奥西さん自身はリーダーとして、後輩が頼って来やすい環境作りやチームのモチベーションを保っていくことなどにも気を使って活動をされています。また、日頃の活動を決める際には、先輩後輩関係なくお互いに意見を出し合って、一人ひとりが真剣にプロジェクトのことを考えます。時には互いの意見が食い違い、ぶつかり合うこともあるそうです。しかし「考え方が違うからこそおもしろいし、バランスが取れるんです」と奥西さんは話します。

今年は武田山に増えすぎてしまった竹の伐採作業を本格的に行い、植生の維持に力を注いでいく予定です。この活動のために奥西さんたちは研修会に参加してチェーンソーの使い方まで勉強したそうです。伐採で出た竹を使って、おもちゃやプランターなどを作って地域の人にプレゼントするなど、地域とのつながりにも力を入れています。「大人、子ども関係なく武田山の良さを少しでも知っていってもらいたい」という想いのもと、奥西さんたちの活動は続きます。

取材させて頂いた奥西さん、本当にありがとうございました。